

両手両脚を畳の上へと無造作に投げ出し、大軒をかいて眠つていた漣の鼻腔を、甘い香りがふと掠める。

漂う香りに誘われるようにして意図せず瞼が開き、心地よい夢の世界は途端に現実の向こう側へと追いやられてしまった。

どのような夢であつたかなど目を開いた途端に忘れてしまったが、唐突な覚醒を不愉快に感じたということは、少なくとも漣にとつて、現実よりも居心地の良い世界だつたのだらう。

どうせいま目覚めたところでやる事もないのだと眉を寄せつつ、二度寝に備えて寝がえりを打つたのだが、漂うその甘さの中、想い人の気配が入り混じっている事に気が付いてしまった。

「猫、帰ってきたのか!」

人に懐かぬ野良猫のような俊敏さで体を起こし、堪らず駆け出す。

中国からやってきた青龍の化身と共に彼が任務へと出かけていったのは何日前だつたか。

どこかの館に巣食う悪霊を退治する事が目的だと主から聞

かされていたが、退魔を専門とする彼にしてはやけに手こずっているなどこの数日、やきもきとしていたのだ。

ようやく帰還したのかと漣が表情を輝かせたのも束の間

「……なにがあつたんだ、コレ」

待ち人は、あろうことか女の膝の上で囁かされていた。

「あら、漣さん」

縁側にて、自身の露わになつた太腿へ猫を寝かせ、まるで子供を寝かしつけるかの如く仕草で彼の黒髪を梳いていた銀寿は顔を上げると、駆けつけてきた漣におつとりと微笑みながら人差し指をそつと艶やかな唇の前で立ててみせた。

「起こしたら可哀想ですわ。しばしの間、お静かに」

振り向いた銀寿の背後からそつと猫の顔を覗き込んでみる。

どうやら氣を失っているらしい。

凛々しい眉は苦々しげに寄せられており、顔面は蒼白、薄く開いた唇からは苦しい呻き声と聞き取れない寝言が絶え間なく

こぼ お 零れ落ちており、随分と憔悴している様子であった。

銀寿曰く、任務先で青い作業服姿の巨人に屋敷内で散々と追
まわ しんしん ひへい けい 業 服 姿 の 巨 人 に 屋 敷 内 で 散 々 と 追
い回され、心身ともに疲弊し切っているらしい。

ちなみに鼻腔を挿った甘い香りの正体はというと、情けない
すがた さら はく み ちややむすめ 姿 を 晒 し た 伯 を 見 か ね た 茶 屋 娘 の ね ね こ が 分 け て く れ た 団 子 で
ある。しかし、未だそれは手つかずのまま膝を貸す銀寿の傍らに
しよざい 所在なさげにただその匂いだけを辺りに漂わせていた。

「……変わった悪霊とやり合ってたんだな」

悪霊とは大体が世の理を覆す奇怪な姿や能力を備え
てい る も の の だ が、 そ れ に し て も 館 に 巢 食 う 作 業 服 姿 の 巨 人 と は
みよう やから れん くび かしげ 妙 な 輩 だ と 漣 が 首 を 傾 げ る と、 銀 寿 も 同 調 す る よ う に 小 首
かし とまど にじ びしよう を 傾 げ、 戸 惑 い の 滲 ん だ 微 笑 を 浮 か べ た。

「伯さんを抱えて帰ってきた蒼牙くんも随分と疲れていました
から、手強い相手だったんでしようね」

どうやら彼は本丸に辿り着く前から既に意識を失っていたら
しい。

うで た 腕 つぶしが立つような男ではなかったが、彼も陰陽師の端く
れである。並大抵の悪霊ではとても敵わぬ程の霊力を持つてい
るにも関わらず、ここまで疲弊するとは一体どんな強敵と対峙し
てきたのだと肝を冷やさずにはいらなかった。

「銀寿、そこ代われ」

が、しかし——どんな事情があるにせよ、想い人が他人の
ひざ か 膝 を 借 り て 寝 込 む な ど、 心 の 狭 い 漣 と し て は 許 容 し か ね る
じようきよう 状況だ。

ずかずかと苛立つ足取りで銀寿の元へ歩み寄ると、その傍ら
こし お に 腰 を 下 ろ し て 胡 坐 を か き、 意 識 を 失 っ て い る 伯 の 頭 を こ ち ら
よ みずか ひざ てのひら へ 寄 こ せ と 自 ら の 膝 を 掌 で 叩 い て み せ た。

敏い女はその仕草ひとつで漣の心境を読み取ったらしく、な
にやら意地の悪い微笑をほんのりと口元へ浮かべたあと、わざと
かた すく うなが らしく肩を竦めながら促されるまま、伯の頭を引き渡す。

「残念ですわ。伯さんの可愛らしい寝顔、もつと眺めていたかつ
たのですけれど」

漣れんを擲や擲ゆする為ためだけに、平氣へいきな顔かおをして心こころにもない台詞せりふを口くちにするこの女狐めぎつねは相變あいかわらず侮あなどれない存在そんざいであると半ば感心なかしつつも、これ以上いじょうは関かわり合あいになるまいと彼女かのじよからまんまと奪うばつた狼はくの頭あたまを自身じしんの太腿ふとももへと乗のせ、さてこれからは心ゆくまでこの寝顔ねおを堪能たんのうするぞと未だ苦くるしげに歪ゆがめられているその表情ひようじようをじつくりと見下みおろしてみる。

枕まくらにしていた女の柔おんない太腿やわふとももが、突如とつと硬かたい筋肉きんにくに變かわつたせいか、狼はくは寝心地ねこち悪わるそうにその眉まゆを険けわしく顰しかめてみせると、収おさまりの良い場所よばしよを求もとめているのか、もぞもぞと落おち着つきなく身みじろぎを始はじめた。

ああ、このままではきつとすぐに目め覚ざめてしまうだろうな、と懸念けねんした矢先やさき、漣れんと揃そろいの紅化粧べにげしやうを施ほどこした臉まふたが薄うすく開ひらき、月つきの光かがやに、こんじきに、こんじきひとも、輝きらきとよく似た金色こんじきの瞳ひとみがこちらへと向むけられる。

「まったく、お前まえつてば意外いがいと贅沢ぜいたくな野郎やろうだったんだな。女おんなの膝ひざでしか眠ねむれないっていうのかよ」

苦笑くしやうま交やじりに八やつ当あたりの言葉ことばをぶつけてはみたものの、寢起ねお

きの頭あたまでは未だ現況げんきようが把握はあく出来できていないのか、寢ぼけ眼まなこのまま狼はくはゆつくりと瞬まばたきだけを繰くり返かえしている。

夢ゆめと現うつの境界きやうかいを馴染なじませるように、ゆつくりと。

たつぷり時間じかんを掛かけた後あと、ようやく意識いしきが覚醒かくせいを始はじめたらしい。

「……漣？」

落おち着ついた声音こゝねが、ようやく自分じぶんの名なを呼よんでくれた。

「任務にんむのこと、覚えてるか？ 蒼牙そうががお前まえを本丸ほんまるまで抱かかえて帰かえつてきたんだとよ」

すると狼はくは逡巡しゆんじゆんの後あと、ようやく自みずからが置おかれた状況じやうきやうに氣きが付ついたようだ。

無事ぶじに清州きよすへ歸かえりついた事ことに対する心こころからの安堵あんどと、恐おそろくはそうとうてこわあいて、対峙たいじしたのであろう任務にんむの過酷かこくさが入まり混まじるやうで、ひようじようう複雑ふくざな表情ひやうじようを浮うかべて、頭上ずじやうの漣れんを眺ながめ上げていた。

「あとで蒼牙君そうがくんに謝あやまらなければ……」

言いながらも、今はその氣力きりよくがないのか、再び狼はくは力ちからなくその臉まふたを閉とざしてしまつと、寢心地ねこちがあまり良くないであろう漣れん

膝の上に頭を預けたまま、溜息を一つ零してみせた。

「申し訳ありません、しばらくこのまま横になっけていても良いですか」

言わずもがな、大歓迎である。むしろ、それを求めて銀寿の膝から彼の身体を奪ったのだ——とは、とても白状出来ず、

「俺の膝は高いぞ。それでも良いなら、いくらでも貸してやる」
などと傲慢な物言いで、本音を覆い隠す事にした。

寝込んでいる狼の元へ団子を持って行ったは良いが、茶を添えるのを忘れていたと、ねねこは盆に湯飲みを一つ載せ、再び縁側へと向かっていた。

あんなに青い顔をしていたのだ、飲み物もなしに団子など頬張つたら喉を詰まらせてしまうかもしれないと急いでいると、ふと何者かに前垂れの結び目を軽くちよいと引かれ、思わず足を止める。

振り返ると、気を失っている狼に膝を貸していたはずの銀寿が障子の後ろへ身を隠すように立っているではないか。

「どうしたのよ、銀寿。そんなところで……」

不審な彼女の様子を指摘しようとして口を開いたその時、見上げた先で銀寿が長くしなやかな人差し指を自身の口元へと当て、声をださぬようにと言葉の続きをそつと制止した。

「ねねこちゃん。そのお茶は、私たちで頂きましょう。狼さんたちの邪魔をしたらお馬さんに蹴られてしまいますわ」

いや、馬ではなく獅子かしら……。

などと言いながら、銀寿は盆に載せられた二つの湯飲みのうち一つを自らの手に取ると、障子の影に身を半ばまで隠したまま、ずずつと呑気に茶を啜り始める。

「馬だの獅子だの、なんだっていうのよ」

銀寿の態度が解せず、ねねこも彼女に倣って障子の影に身を潜めながら、縁側の様子をひよいと覗き込んでみる。すると、
「……確かに、獅子が居るわね」

覗き見たその先で、相変わらず狼は具合が悪そうにその身を横たえていたのだが、彼がいま頭を預けているのは銀寿の膝ではなく、獅子の化身である漣の膝であつた。

なるほど、確かに水を差すような真似を仕出かせば馬——もとい、獅子に蹴られて怪我をしようかもしれない。

「要するに、銀寿は漣に役目を取られちゃつたつてワケね」

基本的には性別や年齢を問わず、獅月漣という男は誰に対してもそれなりに優しい男であるのだが、その中でも相棒の狼には特別な想い——要するに性別を越えた恋慕を抱いている為、その甘やかしようは見ているこちらが思わず赤面してしまう程だつた。

が、しかし。当の狼はというと、まさか同性から下心を向けられていたとは知る由もなく、彼の好意を単なる親切と解釈をしているらしく、その想いは今のところ報われてはいない。

見た目によらず、辛抱強い男だとねねこは半ば呆れつつも、しばらく銀寿と共に茶を啜りながら、焦れたい関係を保ち続け

ている二人の男の様子を不安げな面持ちで、そつと障子の影から観察し続けていたのであつた。